研修会のお知らせ
41ページ参照

平成12年6月8日　第三種郵便物認可（毎月1日発行）　平成26年11月1日発行

2014.11
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみやく
富薬

11号
第36巻
No.304

センナ　*Cassia angustifolia* Vahl　　（マメ科　*Leguminosae*）

生薬　センナ

生 薬　センナ　開花前に葉を摘み取り、陰干しする。

成 分　sennosideA,B,C,D,G、aloe-emodin-dianthrone glucoside、rhein、aloe-emodin、chrysophanol、kaempferol、isorhamnetin 等。

効 能　緩下剤として便秘症に用いる。

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター
村上守一氏　写真撮影

◯◯表紙について◯◯

　現在用いられている主なセンナには二種類あります。一つはアフリカ原産の常緑小低木、高さ１ｍ、葉は互生し、偶数羽状複葉、小葉は４～10対、披針形で、インド半島南端部のチンネベリー地方で栽培されるチンネベリー・センナ（ホソバセンナ）で、イギリス、日本に輸出されています。インドでは二大古典医学書の一つ『スシュルタ・サンヒター』（ＢＣ６世紀）に下剤として収載され、古くから用いられていました。

　もう一種はナイル川流域の北緯24～14°の間に原生し、小葉は３～９対、卵状披針形でエジプト、スーダン、サハラ地方で栽培され、アレキサンドリアが集積地となっているためアレキサンドリア・センナ（*C. acutifolia*）と呼ばれ、主に欧米で利用されています。エジプトにおいては世界最古の医学書と言われる『エーベルス・パピルス』（ＢＣ1550）に収載され、「下剤として（31）　コムギ（*Triticum sativum*）の粉末、ジュニパー（Ｊ *uniperus communis*）の実、タイガーナッツ（*Cyperus esculentus*）の塊茎、センナとカラシ（*Brassica juncea*）を、すり潰して柔らかな塊にし、お菓子にして患者に食べさせる。」等、６例の処方が記載されています。

　古代エジプトやインドで用いた薬物の多くは古代ギリシア、ローマに受け継がれていますが、ディオスコリデスの『薬物誌』には記載がなく、ヨーロッパには伝わらなかったようです。11世紀になってアラビアのカリフ（イスラム教最高権威者）の侍医がヨーロッパに伝えたことから広がったと伝えられています。シェークスピアの戯曲『マクベス』の第五幕、第三場の中で、イギリス軍に追い詰められたマクベスが医師に対して「薬草のダイオウなりセンナなり、他のどんな下剤を使ってでもイギリス人たちをこの国からきれいに一掃してほしい。」と言う場面があります。マクベスは実在のスコットランド王で1040～1057年まで在位していました。伝わったばかりの薬草を医師でもない国王が例えに使うことは考えられませんが、作者のシェークスピアが1606年頃執筆したとされていることから考えると、その頃には大黄やセンナがかなり使われていたと考えても不思議ではありません。

　日本に渡来したのはかなり遅く、『和蘭薬鏡』（1820）に初見されるところからオランダから伝えられたようです。「常に大黄を服すれば是に慣て通利せず。久服するに隋ひ逾便閉を患ふ。此症は患者の體稟に隋ひ旃那葉蘆薈（センナ　ロカイ）等を用ひ。」と記されています。明治22年（1889）に発行された『日本薬局方第一版』にも瀉下剤として収載されています。中国に伝わったのは日本より遅く、始めての記載は『飲片新参』（1935）で、「熱を泄する、腸府を利す、大便を通す。」と記されています。　　　　（村上守一　記）